

会津若松市におけるコミュニティとパブリックアートの関係

26番 古川美保

要旨

パブリックアートは1960年代にアメリカで生まれた言葉である。以後、1980年代にパブリックアートという言葉が日本で使われるようになってから、「アートを使った街づくり」が全国各地で行われるようになった。現在会津若松市でも街のあちこちに彫刻やモニュメントなどのアートが設置されている。しかし市民がアートに対してどのように考えているのか、また市民が何を必要としているのかが曖昧なままアートの設置が進められている。その結果、景観の改善や文化的教養の啓蒙のために置かれたアートは機能せずに住民に邪魔もの扱いされているのも事実だ。

本研究は、会津若松市においてのパブリックアートとは何かを論点とし、市民の「アート」への意識調査をふまえて、市民とパブリックアートとの関係をよりよいものにするためにはどうすべきなのかを思索する。

1. 背景

テーマを決定するにあたり、会津若松駅前サティの前に存在する1つのモニュメントに着目した。この作品は芸術的な要素があるものの、歩道に置かれているため道に圧迫感を与え、作品の価値を低下させている。時には両隣に置かれた自転車倒れが景観的にもマイナスのイメージを受けてしまう。なぜこの場所に置いたのか、目的は何か、という疑問からアートを使った街づくりについて興味を持った。後の調査の結果、このモニュメントはサティの所有物でガス灯と共に約20年前に設置されたことが分かった。詳しいコンセプトなどは明らかにならなかったが、テナント側と住民が協力して作り上げたもので、企業と住民が共に街づくりをしていくシンボルとして設置されたものである。しかし、現在では景観の向上や住民とのつながりを示す物としての機能が薄れてしまったと思われる。このことをきっかけに、パブリックアートの設置者が意図した機能を果たすためにはどうすればよいか、また会津若松市に必要なアートとは何か、を探るべく研究を始めた。

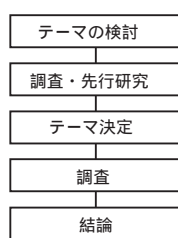


会津若松駅前サティ

2. 目的

本研究は地域や市民に必要とされるアートの方向性を見いだすことを目的とする。会津若松市に現在存在しているものが機能していない、また好まれぬ原因は何なのかをつきとめ、改善に向かうことで、より馴染みやすい景観、街づくりが可能になると考える。

3. 課程



4. 先行研究

パブリックアートの歴史、種類、目的など、これまで行われてきたものの調査を行った。パブリックアートの概念については今も確定しておらず、定義も人それぞれであることも判明した。今回は秋葉美知子著『パブリックアート概念の整理』(デザイン学研究VOL.45 NO.4 1998)を参考に一般的に多く述べられている定義に基づいて研究を進めることにした。

<パブリックアートの定義>

- ・無料で人々が行くことが出来る開放された場所にあるもの
 - ・屋外にあるものを主とする(対峙する人を限定しない場合は屋内も含む)
 - ・芸術的要素が高い公園のベンチ、街灯、ストリートファニチャーも含む
- また、今回は私独自の「特定の人物の銅像などはアートに含まれるか」という疑点についても調査していく。

5. 現地調査の手順と方法

現地調査は、定義にしたがって市内のパブリックアートの資料を集め、それをもとに作成したアンケートを中心とする。

アンケートはパブリックアートの資料となる写真を提示しながら行った。項目は、パブリックアートの言葉の認知度、市内に存在するパブリックアートの認知度、またそれらをどう思うか、どの程度の物をアートとして見なすか、会津若松市にパブリックアートは必要か、などを挙げた。会津若松駅周辺、七日町駅周辺で男女合計87の回答を得た。

| | | | | | |
|----|--------------|----|----------|----|-----------|
| 年齢 | 10・20代...27人 | 性別 | 男性...28人 | 住所 | 市内 ...71人 |
| | 30・40代...31人 | | 女性...59人 | | その他...16人 |
| | 50・60代...29人 | | | | |

アンケート 資料(一部)



6. 調査結果

まず、パブリックアートという言葉を知っていると答えたのは全体の29%であった。そのうち64%が10・20代で、30・40代が28%、50・60代は8%と非常に少ないことが分かった。次に「何を『アート(芸術)』だと思うか」という質問においては6つの写真< 会津総合体育館内広場に設置してある、平和をテーマにしたモニュメント(しあわせ) 鶴ヶ城 相生町1-10付近のポケットパーク 県立博物館付近の銅像(至福の時) 白虎隊記念会前に設置してある白虎隊の銅像 鶴ヶ城三の丸の伊東正義の銅像>の中から選んでもらった。(複数回答可)

これによって 抽象的なモニュメント 会津の代表的な建造物 意匠に凝っているストリートファニチャー 作家が作った銅像 会津を代表とする歴史上の人物の銅像 会津出身の人物の銅像の、どれが市民の中でアートと見られているのかを調べた。

調査結果の中で注目した点は、10・20代の78%と30・40代の61%が のモニュメントをアートだと答え、の人物像と答えた人は0%、3%とほとんどいなかった。それに対し、50・60代では と答えたのは28%程度での人物銅像をアートに含めるという回答が45%もあった。世代によってアートのとらえ方と大きな違いがあるといえる。この結果から私の「特定の人物の銅像などはアートに含まれるか」という疑問に関しては「見る側の意識によって、人物像もアートに含まれる」ことが明らかとなった。そして、「パブリックアートは必要か」という質問には、「はい」46%、「いいえ」22%、「分からない」32%と、多くの市民がアートを必要としていることが分かった。しかし実際に街に置かれている物をどう思うかという調査では、好感を持っている人が少なかったことも分かった。

調査から、アートが機能していない主な原因は、対峙する人や場所に合わせてアートを設置していないからだと思われる。アートにもある程度の使い分けが必要かもしれない。どこに何を置くかについては、まず環境をよく認識することが重要だ。どの世代が多く存在するかなどを調べてから、何を置くべきか検討すべきだ。また、歴史的な地に極端に現代的なものを置かない配慮も必要だ。市民がパブリックアートに好感を示すかどうかを調べるには、一時的にサンプルになるものを設置して市民の反応を見ることもできる。アンケート調査でいくつかの中から選んでもらうことも有効だと思ふ。

次にアートを置く環境も整えておくべきだ。小田橋付近の銅像には歩道の脇にアートを置くスペースが設けられていた。このように通路となる場所にアートを置く場合は大きさや場所の確保、通行人との距離に配慮しなければならない。

市内でパブリックアートと思われるものは公共事業で設置されたものよりも、誰かの所有物であったり建物の敷地内にあるものの方が多かった。今回の研究で、誰かの所有物でも心が動かされるものがあるならば、それは公で設置されたものでなくてもパブリックアートだと言えるし、歴史的なものなども対峙する人の意識によってはパブリックアートになりうるということが分かった。

7. 考察

近年公共事業では道路整備工事に併せて、単に通過交通のための道づくりではなく歩行者が潤いを感じたり、集えるような、人に優しい道づくりををする目的でポケットパークやモニュメントを設置している。この中にはモニュメントなどの造形物の他に、野口英世青春通りに設置されているシンボルツリー、飯盛山付近の白虎隊の意匠が施されたシンボルツリー、相生町のポケットパークには池やバーゴラなどもある。市では民地におけるストリートファニチャー等の整備について助成金の交付を行うなど積極的な動きも見られる。

今後はアートを使った街づくりが公共事業でも更に拡大していくかもしれない。市民が日常にアートを必要としていることから、パブリックアートが本来ある力を十分に発揮することが出来れば市民と地域をつなぐ重要な役割を果たすことができるといえる。今回は実際にデザインし、市民に評価をしてもらう段階まで至らなかったことが反省点として挙げられる。